

異文化コミュニケーション研究における「日本人」 というとらえ方について

Ways to Treat “Japanese” in Intercultural Communication Studies

石黒武人

Taketo ISHIGURO

Abstract: In recent years, Japanese society has increasingly become multicultural. In a multicultural environment, such elements as nationality and appearance cannot always determine who Japanese are and who exhibits Japanese cultural characteristics in communication. Thus, the concept of being “Japanese” or “Japaneseness” has been in need of re-examination. The purpose of this paper is to explore an effective way of treating the concept of “Japanese” which serves well for intercultural communication studies. This paper discusses an alternative way to treat “Japanese” in face-to-face intercultural communication research. The concept of “Japanese” carries some typical meanings and images such as harmony, vertical society, and “amae”. Those well-accepted images of “Japanese” have been popularized by Japanologists and intercultural communication scholars. Such monolithic categorical explanations of “Japanese,” may hinder intercultural communication scholars from critically examining what “Japanese” means in actual communication situations. In this paper, some major characteristics of the concept, “Japanese”, in Japanology are examined in relation to intercultural communication research. As a result, it becomes evident that the concept, “Japanese” may turn into an obstacle to understanding how “Japanese” function in face-to-face intercultural communication. In an attempt to overcome that obstacle, this paper discusses an ethno-methodological approach to treating the concept of “Japanese”.

1. はじめに

異文化コミュニケーション研究において、日本人に関連する多数の研究がこれまで行われてきた。そうした研究における主張や命題、論証の過程、ならびに研究の結果には、「日本人」という表現や「日本人は～」ではじまる言説が数多く含まれている。たとえば、国民間の価値観の差異に関して、「米国人から見れば、イスラエル人は、リスク志向に見える。しかし、日本人から見れば、米国人がリスク志向である（海野，1998，p.165）」という説明が用いられる。この「日本人」とは、いったい誰のことを指しているのであろうか。さらに、この「日本人は～」というとらえ方は、異文化コミュニケーション研究にとってどのような意味をもつのであろうか。

日本社会の現状へ目を移せば、1980年代後半からのニューカマー流入人口の増加¹、今や20組に1組といわれる国際結婚件数の増加、長期海外留学経験者²の増加、さらには、在日韓国人・朝鮮人コミュニティーに代表される「内なる異文化（対抗文化）」の可視性の高まりなどが示すように、個人、家族、学校、職場、地域社会などさまざまな場で多文化化³が進んでいる。その進展につれて、「日本人」の意味が多様化している。そのため、「日本人」といった場合に、国籍や外見といった外在的な基準によって、その「日本人度」を判断することに対して、これまで以上に慎重な態度をとることが要請されているように思われる。そこで、本稿の目的は、異文化コミュニケーション研究において、研究に携わる者が「日本人」という概念をどのようにとらえることが適切かについて考察を試みることである。

本稿では、今日の「日本人」像を形づくるうえで多大な影響を与えたと考えられる「日本人論」に着目した。日本人論のなかでも、まず、「日本人」を単一の日本文化の担い手とし、その特殊性を基調とする日本人論に言及し、そこでの「日本人」のとらえ方を検討する。つぎに、その特殊性を基調とする日本人論を批判する形で登場し、日本文化を複数とみなすことによって、その担い手である「日本人」が文化的に多様であるという多文化主義的な観点を採用した日本人論における「日本人」のとらえ方の特徴とその問題点を整理する。

さらに、既存の「日本人論」が促す研究の視点がもつ問題点を乗り越えようと試みるうえで、1つの有益な着想を提供すると思われるエスノメソドロジーについて言及し、最後に、異文化コミュニケーション研究における「日本人」のとらえ方について総合的に考察しようとする。

2. 異文化コミュニケーション研究における「日本人」のとらえ方

一般に、「日本人」を定義する際に、法律的視点、生物学的視点、文化的視点の3つを少なくとも挙げることができよう⁴。まず、法律的視点から、「日本人」は日本国の国籍をもっているとする立場がある。つぎに、生物学的視点から「日本人」を位置付けた場合、日本列島に住んでいるモンゴロイド系の人種的特徴をもっている人を指している。文化的視点では、日本社会において生活する人々によって共有、学習された⁵知覚パターン、価値前提、コミュニケーション・スタイル、生活様式をもち、日本語を話す人と位置付けることができよう。本稿では、最後に挙げた文化的視点から、日本文化の担い手としての「日本人」に着目し、「日本人」のとらえ方について考察する。それでは、つぎに、本研究で射程とする「異文化コミュニケーション研究」⁶の限定的な意味と目的を示したい。

石井（1996，p. 73）によれば、「基本的には、異文化コミュニケーション研究は、複数文化の単なる比較や対照ではなく、文化の異なる人たちが直接に対面（face-to-face）して行う相互作用

用に焦点をおく」とし、「この相互作用と文化の関係が異文化コミュニケーション研究の主題である」と主張している。本稿では、この主張に従って、異文化コミュニケーション研究を理解し、対面状況において実際に相互作用を営む「日本人」のとらえ方を検討しようとする。そこで、「異文化コミュニケーション研究」を、「少数者間の対面状況におけるコミュニケーションと文化の関わりを解明し、異なる文化同士の交錯に起因する異文化摩擦の要因を明らかにし、相互理解を促すための研究」と設定したい。この意味での「異文化コミュニケーション研究」において、「日本人」をどのようにとらえるべきかについて考察する。

3. 日本人論における「日本人」のとらえ方

日本文化、日本人に関連する文献のなかに、日本人論と呼ばれるジャンルがある。代表的な文献としては、ルース・ベネディクトの『菊と刀』、中根千枝の『タテ社会の人間関係』、そして、土居武郎の『「甘え」の構造』などが挙げられる。それらの文献を通じて、「恥の文化」、「タテ社会」、「ウチとソト」、「甘え」、「縮み志向」、「ぼかし」、「ホンネとタテマエ」、「いき」といった鍵概念が、日本人もしくは日本文化の特徴として紹介されてきた。これらの日本人論の代表作と鍵概念は、日本の国内外において「日本人は～である」という「日本人」の単一的なとらえ方を形づくってきたと思われる。杉本・マオア（1995, p. 28）は、「いまや、日本人論そのものが、ひとつの社会的な力になり、日本人の自画像を形づくっている」と指摘し、また、「その自画像が、実は国際理解や社会間のコミュニケーションの大きな壁になっている」と述べている。このようなコミュニケーションに関わる副作用をもった日本人論が形成してきた「日本人」のとらえ方が、実際の異文化コミュニケーションや「異文化コミュニケーション研究」における「日本人」のとらえ方にどのような影響を及ぼしているのかを知るためにも、まず、日本人論の諸相とそれらの問題点について整理する必要がある。

日本人論における「日本人」のとらえ方は、大別して2つある。1つは日本人特殊論である。日本文化を単一で特殊な文化圏とみなし、その単一文化の担い手としての「日本人」という考え方が呈示されている。一方、特殊論を批判する形で出てきた多文化主義的な日本人論がある。それは、「日本社会は多様な文化がモザイク上に交錯する多文化社会である（杉本, 1996, p. 15）」という考え方に立脚し、階層文化を複数の多様な日本文化と認め、その担い手である「日本人」も多様であるとする日本人論である。日本人論においては、前者が支配的であり、後者は少数派⁷である。それでは、まず、日本人特殊論の特徴と問題点について詳説する。

特殊論的な日本人論において呈示される「日本人」像は、次の3点に要約される（杉本・マオア, 1995, p. 198）。まず、第1に、「個人心理のレベルでは、日本人は自我の形成が弱い」とされ、「独立した“個”が確立していない」というものがある。第2に、「人間関係のレベルでは、日本人は集団志向的である」とし、「自らの属する集団に自発的に献身する（グループイズム）が、日本人同士のつながり方を特徴づける」とある。そして、第3に、「社会全体のレベルでは、コンセンサス・調和・統合といった原理が貫通している」ため、「社会内の安定度・団結度がきわめて高い」としている。いずれも異文化コミュニケーション研究において使用されることがある言説⁸である。特殊論では、以上のような全「日本人」的な見方を提供している。

また、非言語コミュニケーションにおける「日本人」の特徴についても一般論が展開されている（河合・石井, 2002, p. 33）。典型的な例としては、「日本人はほとんど表情が変わらない」、あるいは「手も振らないし、抱き合ったりもしない」といった「日本人」像が挙げられる。その

ため、異文化出身者の視点から見ると、「日本人」は表情および身体的表現に乏しく、その真意を比較的理解しにくい存在であるように描かれる。

以上のような特殊論が呈示してきた言説には、つぎのような批判がなされてきた。まず、杉本(1996, p. 10)は、「日本文化全体の特性を論じる人たちは、ほとんどの場合、観察の対象を男性で大企業に勤めている大学卒に求めている」という点を指摘し、「彼らは日本の人口のなかでごくひと握りの少数派にすぎないのに、日本文化の中身についての命題を引き出すための主要なサンプルの役割を果たしてきた」と批判している。杉本(同上, p.10)は、このような「大学卒、大企業、男性の世界」に生きている者が、日本人論を書き、読み、そして編集してきており、自分たちの社会・文化環境が日本社会全体のなかでは特別なものであることを自覚できない、と指摘している。

また、特殊論的な日本人論においては、単一の「日本人」像を呈示するために、その特徴からはずれる人々や言動は、日本人として適切ではないという考え方を促す可能性をもっており、同化主義的な見方であるという批判もある。つまり、文化的に「純粋日本人」の条件を定め、その条件を満たす人々を「日本文化」の担い手であるとし、「真の日本人」になるように促す(杉本, 1996, p.15) 同化主義的日本人論である⁹。

以上のような特徴と問題点をもつ日本人論における「日本人」のとらえ方は、「異文化コミュニケーション研究」に携わる者が、研究対象となる人々を文化的に「日本人」であるかどうか判断する基準を設定する際、少なからず影響を与えていると思われる。事実、石井(1997, p. 31)によれば、1960年代、日本における初期の異文化コミュニケーション研究において、「甘え」や「タテ社会」といった日本文化論が重要な役割を果たしてきた。「日本人」のとらえ方ひとつで、研究の枠組みおよび「日本人」の基準が左右されることを考えれば、日本人論のもつ影響は無視できない。

たとえば、特殊論的な日本人論において「日本人」を規定する基準の1つは、「日本人は集団主義的傾向をもっている」というものである。このような言説によって説明のつく現象は多々あるが、ここで言う「日本人」がどのような属性(階層)の人々が明示しないことが多く、多文化化が進行している日本社会の「日本人」を全体として説明するには苦しさがある。

また、「集団主義的傾向をもっている」という場合に、どの文化と比較して集団主義的傾向をもっているのかを明示しない場合が多い。加えて、日本人論の読み手も、そこまで慎重に日本人論を吟味しない傾向にある。船曳(2002, p. 60)は、中根(1967)の『タテ社会の人間関係』を例にとり、中根の論ずる「タテ社会」が、西欧ではなくインドの「ヨコ社会」と対比されていることをどれだけの人が知っているだろうかと問題を提起している。

多くの場合、想起される比較の対象は欧米諸国の人々である。通常、「日本人は集団主義」という場合も欧米の人々と比較している。ここでいう「欧米」とは、ヨーロッパの国々とアメリカ合衆国をひとまとめにした「欧米」というとらえ方であり、それ自体非常に大雑把である。共通する文化的特性があるとしても事実上多様な文化群を含む「欧米」、そして1つの国民文化を示唆する日本という等価性の異なる¹⁰対象同士を暗黙のうちに比較の対象としていることにも問題がある。全「日本人」としての文化的特徴を「欧米」や他国人のそれと比べる視点は、日本国内で多様な文化を担う「日本人」像を知覚しづらくするだけでなく、他国内の文化的多様性をとらえきれない人々を再生産していく危険性を秘めている。

上述したような特殊論による「日本人」のとらえ方を批判的に扱う姿勢をもち、日本社会に内在している多様な文化群を汲みとろうとする立場が多文化主義的アプローチの日本人論である。

多文化主義的な日本人論は、「日本社会の中にある多様な階層文化を総点検することを、日本文化分析の第1歩と考える(杉本, 1996, p.15)。」杉本(1996, p.16)は、階層文化を、地域、性別、世代、職種、地位、学歴など多様な次元からみた文化も含むものとして扱っている。また、それらに加えて、海外子女や障害をもつ人々をもつ文化もあろう。さらに、国際結婚した両親のもと、日本社会で育った境界的な文化的アイデンティティーをもつ人々の文化もある。

多文化主義という視点を採用することにより、多様な「日本人」たちがもつ文化群をとらえるという視点が生まれる。多様な文化に属する複数形の「日本人」たちは、日本社会で生活していく過程で、どのような「日本的」な文化的特徴を学習し、共有しているのだろうか。「日本人」のこのとらえ方に基づいて、多様な「日本人」の文化的特徴に関する研究が進めば、そのような多様な日本文化の特徴が明らかになるだけでなく、多様な日本文化群の間で共通する文化的特性が抽出される可能性もある。つまり、特殊論的アプローチのように、ある特定の階層の人々から抽出した文化的特徴を「日本人は～である」と一般化するのではなく、各階層文化からサンプルを得て、実証的な研究がなされた結果、より現実にもつじた「日本人」のとらえ方ができると推測される。

さて、ここで、上述した2つの日本人論が示す「日本人」のとらえ方について、「異文化コミュニケーション研究」との関係において、その是非を検討したい。まず、本稿で扱う「異文化コミュニケーション研究」の目的は以下のようなものであった。それは、「少人数間の対面状況におけるコミュニケーションと文化の関わりを解明し、異なる文化同士の交錯に起因する異文化摩擦の要因を明らかにし、相互理解を促す」ことであった。これを、「日本人」のとらえ方との関係で見直すと、人々が対面状況における異文化コミュニケーションの過程で、本人が意識するしなやかにかかわらず、どのように「日本人」としてコミュニケーションを構成し、さらに、異文化出身者から見たその「日本人」の特徴と問題点を明らかにしていくことが必要である。

以上の目的と照らし合わせて、2つの日本人論を検討しようと試みる。まず、日本人特殊論は、日本文化を単一文化としてとらえ、特殊な文化の担い手として「日本人」をとらえている。このとらえ方は、多様な日本人の中で共通した文化的特徴を見いだすには有効であろう。しかしながら、多様化した「日本人」たちの間にある文化およびコミュニケーション行動の差異を想定していないという点で限界がある。また、研究活動において、研究に携わる者が、特殊論で提示されてきたような「日本人は集団主義である」という文化的特徴を自明のものとして仮説の設定を行うこと、もしくは論述の前提条件とすることを促がす危険性がある。

一方、多文化主義的な日本人論は、多様化した「日本人」をとらえるという点において、多文化化した日本社会のニーズに合っている。特殊論的なとらえ方では隠されてしまうような地域間や世代間などの差異もとらえる視点を備えている。ただし、研究者が規定する階層文化を前提としているため、その階層文化、つまり、日本文化のバリエーションに該当しない人々は「日本人」とされず、見逃されてしまう可能性がある。より本稿の主旨にそっていえば、研究者がある対面状況の相互作用を調査する際に、ある階層文化を設定し、その担い手としての「日本人」の文化的特徴やコミュニケーション行動を記述しようと試みる場合、研究者が日本文化であると認める階層文化群の範疇からはずれる人々は「日本人」として扱われないことになる。

上述してきたように、2つの日本人論が規定する「日本人」のとらえ方では、一方(特殊論)で、同質性に焦点が置かれ、階層文化のもつ差異が隠されてしまう。他方(多文化主義)で、差異を強調するあまり、同質性が見逃されてしまう状況をつくったり、また、研究者が階層文化を設定するために、「日本人」の範疇ちゆうから外れ、対面状況で重要な役割を果たしていても見えてこない

日本文化の存在¹¹をつくり出してしまふ。このような限界を超えて、コミュニケーション行為のなかで表出する文化的特徴を拾い上げるうえで、有効であると思われるアプローチがある。つぎに、そのアプローチが前提とする「日本人」のとらえ方について論述したい。

4. エスノメソドロロジーの観点と「日本人」のとらえ方

3「日本人論における〈日本人〉のとらえ方」において、日本人論における「日本人」のとらえ方とその限界について言及した。この限界を克服するヒントとなり得るものの1つとして、エスノメソドロロジーを挙げることができよう。そこで、まず、エスノメソドロロジーについて言及する。

現象学的社会学の流れを汲むエスノメソドロロジーは、「日常の人々が用いる方法論の研究」(山崎, 2000, p.121)であるといわれる。エスノメソドロロジーにおける代表的研究方法である会話分析では、「異文化コミュニケーションについて〇〇人と〇〇人という国籍のような外在的要因によって、異文化性は存在しないという前提に立っている」(佐々木, 2000, p. 62)。ここで、重要なのが「異文化性」という考え方である。「異文化性」とは、「参加者間の文化差が、当の(異文化間) コミュニケーションそのものにとって、またそのなかで、どのようにして有意味(レリヴァント)となっているか」(西阪, 1997, p. 76)を指している。つまり、「日本人」であるとは、外在的な要因(国籍、出生等)で判断され、自明に、そして、客観的にそこにあるものではない、と仮定し、実際の相互行為における具体的展開の中で達成される(西阪, 1997, p. 81)ものである、という立場をとる。たとえば、あるコミュニケーションにおいて、「女性」、「大人」、「大学生」等である以上に、「日本人」であることが有意味な(レリヴァント)場合、「日本人」として意味を成していると考えられる。

会話分析では、実際の対面状況において、ある人が「日本人」として意味を成している場合、その人が「日本人」であることを達成するために実践した相互作用上の規則を抽出しようと試みる。会話分析を用いる研究者の多くは、ある特定のコンテキストとそこで展開される会話的相互作用を詳細に観察、記述する一方で、その個別なコンテキストで観察される規則を一般化することが可能であるような説明を目指している。これは「文脈から自由であると同時に文脈に敏感な(Context-free and context-sensitive)」な説明(山田, 1999, p. 2)と呼ばれる。

エスノメソドロロジーの立場をとれば、日本人論で問題となった、研究者が設定する文化とその担い手という構図が崩れるため、ある「日本人」が予め単一の「日本文化」や階層文化と結び付けられてとらえられることはない。その結果、上述したように、研究者によって設定された文化からもれ、見逃されてしまうということが起こらない。それだけでなく、エスノメソドロロジーでは、相互行為に関わる人々の間で立ち上がる文化的特徴とその担い手である「日本人」をとらえていくために、本稿で限定した「異文化コミュニケーション研究」が目指す「少人数間の対面状況におけるコミュニケーションと文化の関わりを解明」するのに適している。したがって、現実の相互行為により則した形で、種々の文化を担う「日本人」の姿をとらえることができるのである。

すでに述べたように、エスノメソドロロジーの研究手法として会話分析がある。近年は、異文化コミュニケーションをビデオ撮影し、非言語行動を含む相互行為全体をとらえようとする試みも行われている。このような研究手法は、調査対象者の人数が限られるために多数のサンプルで研究を行う事ができないという限界がある。そのため、共通の文化的特徴を明らかにするためには、多数の研究の蓄積を待たねばならない。しかし、そのような研究の蓄積によって、将来的には、これまで日本人論で呈示されてきた「日本人」像が、実際の異文化コミュニケーションで立ち上

がってくるのかどうかということを検証することができる。したがって、日本人論で描き出された「日本人」が、特定の日本人の集団に関して妥当であると再評価を受ける可能性もある。

5. むすび

本研究では、2つの日本人論ならびにエスノメソドロロジーという3つの観点から、「異文化コミュニケーション研究」における「日本人」のとらえ方について抽象的なレベルで思考実験を試みた。現時点での結論から言えば、エスノメソドロロジーの立場に従って、「日本人」というものを自明のものとして、相互行為的に達成されるものとしてとらえることが、「異文化コミュニケーション研究」の目的に比較的適合していると考えられる。

「外見や国籍といった外在的な基準で日本人であるかどうかを判断しない」というエスノメソドロロジーの観点は、研究に携わる者が無意識のうちに前提としている「日本人」に関する理解を再考する機会を与え、かつ、「日本人」のとらえ方に新たな地平を開く可能性を生み出すと思われる。「日本人」のとらえ方が変われば、「日本人」の関わる相互作用の問題について新たな見方ができよう。多文化化が進む日本社会における異文化コミュニケーション研究を考えた場合、「日本人」のとらえ方について批判的に検討することは重要な課題の1つであろう。今後、さらに、「日本人」のとらえ方について、さまざまな視点から研究し、考察を深めていきたい。

註

- 1 渡辺 (2002, pp. 15-17) によれば、ニューカマー外国人の存在は、都市ばかりでなく、過疎地域の農村にまで及んでいる。都市における代表的な例は、自動車・家電製造業が立地する地方都市に集住する南米日系人の人々が挙げられる。また、農村地域では、国際結婚という形が特徴的である。農村の現地男性たちが、後継者問題も考え、外国人女性と結婚するというものである。
- 2 長期留学経験者（ここでは1年以上とする）は、留学期間中に、異文化に適応するために少なくとも2つのことを意識的にも無意識的にも行うと考えられる。まず、ホスト社会に受け入れてもらうために、異文化の文化的特徴を獲得する。次に、自己のもつ文化的特徴を変容させる。2つ目の文化的変容について、遠山 (2001, p. 112) は、文化の側面を「固定化した情報システム」ととらえ、基本的には「パタン化」するものであるとしつつも、「その固定化した情報システムにも、まったく異なった情報システム(たとえば、異文化圏での衝撃)が大量に入り込むと、少しずつ変容することがある」と述べている。
- 3 宮島 (1996, p. 180) によれば、多文化化は相互的な文化変容という質的な変化なしには不可能な過程であるとし、少数者は適応を強いられるが、受け入れ社会の多数者の側も変わるという点が重要であると指摘している。つまり、文化の変容は相互的なものである、という立場である。筆者もこの多文化化のとらえ方を支持し、固定的、静態的な「日本文化」のとらえ方やその担い手としての「日本人」という考え方では限界があると考える。
- 4 フリー百科事典『ウィキペディア』<http://ja.wikipedia.org/wiki> の日本人に関する説明を参考にした。
- 5 遠山 (2001, p. 111) は、数多く提示されてきた文化の定義に共通してみられる特性として、文化が、一定の地域あるいは集団で共通してみられるという、文化の「共有性」と人間が生後獲得するものであるという、文化の「学習性」を挙げている。
- 6 多文化化が深化する日本社会において、現実を反映した「日本人」のとらえ方を検討したい。そのため、本稿では、「異文化コミュニケーション研究」の意味を限定した。

まず、第1に、本稿で扱う「異文化コミュニケーション研究」は表層文化ではなく、深層文化を対象とする。多文化化が進み、外見（肌の色、服装、髪の色や型など）や国籍などの外在的な基準

では「日本人」性が判断できない状況に接し、深層文化を対象として、「日本的」と思われる要素を汲みとる研究を指している。石井他（1997, p. 280）によれば、異文化コミュニケーション論では、文化を「人間が生後学習し、集団の他の成員と共有し、互いに伝達できる生活様式の総体」であるとし、さらに、文化を「価値観や思考様式のような精神文化、言語および非言語行動のような行動文化、そして衣食住のような物質文化によって多重的に構成されている」と分類している。この分類を借りれば、本稿では、「日本人」によって共有されている精神文化および行動文化、つまり、深層文化に焦点を当てている。

第2に、本稿では、国家間、社会間、集団間といったよりマクロな異文化コミュニケーションは対象外とし、少人数間の対面状況での異文化コミュニケーション研究について言及する。国家や社会といった観点からとらえた文化論は、そのマクロな単位で各国家や社会を一枚岩的にとらえて、比較するという作業になり、多様な「日本人」像をとらえるうえで重要と思われる副次文化がマクロな単位の中に埋もれてしまいとらえきれない恐れがある。

小林（1995, p. 39）によれば、異文化コミュニケーション研究は「文化的背景のことなる個人と個人、または、少人数間のコミュニケーションにおけるさまざまな問題の解明と、現実の異文化間コミュニケーションの状況において、異文化誤解を認識し、それを修正して、コミュニケーションを進めていく為の手法や考え方の養成という2つの目的のための研究と応用」である。本稿では、小林の定義に従い、個人と個人、少人数間の対面状況に焦点をあてたコミュニケーション研究を想定している。これにより、個人の言動を規定している副次文化を含めた多様な文化をとらえることが可能となる。

第3に、本稿では、比較文化的コミュニケーション研究ではなく、異文化コミュニケーション研究を扱う。ここでいう比較文化的コミュニケーション研究とは、ある文化集団と他の文化集団のコミュニケーション特性をそれぞれ明らかにし、2つの文化の特性を比較し、やりとりにおいて起こりうる問題を導き出すというものである。このアプローチは、これまで日本人と異文化出身者との異文化摩擦を説明するうえで多大な貢献をしてきたが、過去の先行研究によって明らかにされた「日本人」の文化的特性をもって異文化コミュニケーションを扱った場合、多文化化の影響下で変容した「日本人」の姿は汲みとられない危険性を孕んでいる。そのため、本稿は、対面状況で実際に営まれている異文化相互作用を主として扱う研究を指している。

- 7 杉本良夫ラトローブ大学社会科学部教授の著書が中心で、『日本人やめられますか』、『日本人をやめる方法』、そして本稿でも分析の対象にした『日本人論の方程式』（共著）などがある。本研究では触れていないが、Harry Harootunian, Masao Miyoshi, Victor Koschmann からも日本人論批判を展開している。また、民俗学者である宮本常一の『忘れ去られた日本人』では、日本文化を1つの文化系統としてとらえるのではなく、別の系統の文化の存在を指摘し、東日本と西日本の違いを強調しつつ、村落の生活様式、文化の独自性を示した。さらに、網野善彦、柄谷行人、浅田彰の著作も日本文化をとらえるうえで重要であろう。
- 8 今日、異文化コミュニケーション研究者の多くは、日本文化では個の確立ができずに、埋没し、集団に依存し、集団主義的である、といった言説に対して批判的な見方をしつつも、「日本人」の文化的特徴をとらえるうえで、日本人論が提供している文化に関する説明を多々使用することがある。
- 9 原尻（1998, p. 27）は、「日本人」は、「明治維新以後、政治的に創り出された概念であり、明治時代になってからも一般大衆に〈日本人〉という意識はなかったという資料はあまたある」と指摘し、「日本人」という概念の政治的意味に言及している。
- 10 ここで言う「等価性」とは、2つ以上の概念を比較する場合の概念とそれが意味する内容が等価であり、比較するのに適切かどうかということを指している。
- 11 筆者の職場に、高校・大学時代を米國で過ごした東京出身の女性がいる。彼女が東京出身であることから、東京と大阪の地域文化の差異についての調査のために、彼女を東京の地域文化の担い手として位置付けた場合、彼女が帰国子女として身につけた文化的特徴が隠されてしまう可能性がある。そのような研究の枠組みによるブラインドを克服する試みが次に論述するエスノメソドロジーであるといえよう。

文献

Benedict, R. (1946) *The chrysanthemum and the sword*. Boston: Houghton Mifflin Co. (=長谷川松治訳

- 1967 『菊と刀—日本文化の型』 社会思想社
- 船曳建夫 (2002) 『「日本人論」再考』 日本放送出版協会
- 原尻英樹 (1998) 『「在日」としてのコリアン』 講談社
- 池田理知子・E.M. クレーマー (2000) 『異文化コミュニケーション—入門』 有斐閣
- 今井千影 (2002) 「異文化コミュニケーションと誤解の接点」 伊佐雅子監修、池田理知子・瀬光洋子・今井千景・吉竹正樹・E.M. クレーマー・山田美智子・岩隈美穂 『多文化社会と異文化コミュニケーション』 三修社 45-65.
- 石井敏 (1996) 「異文化コミュニケーションの基礎概念と研究領域」 古田暁監修、石井敏・岡部朗一・久米昭元 『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件』 [改訂版] 有斐閣 61-80.
- 石井敏 (1997) 「異文化コミュニケーション研究の歩み」 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編 『異文化コミュニケーション—ハンドブック』 有斐閣 28-33.
- 石澤靖治 (1997) 『日本人論—日本論の系譜』 丸善株式会社
- 加藤周一 (1976) 『日本人とは何か』 講談社
- 河合隼雄・石井米雄 (2002) 『日本人とグローバリゼーション』 講談社
- 小林路義 (1995) 「異文化コミュニケーション論の現状」 大鹿譲・呉満・小林路義編 『体験的異文化コミュニケーション』 泰流社 36-56.
- 小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源 (日本人) の自画像の系譜』 新曜社
- 宮本常一 (1984) 『忘れさられた日本人』 岩波書店
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』 講談社
- 中根千枝 (1972) 『適応の条件』 講談社
- 中根千枝 (1978) 『タテ社会の力学』 講談社
- 西阪仰 (1997) 『相互作用分析という視点』 金子書房
- 西田司 (1994) 『異文化と人間行動の分析』 多賀出版
- 西田司・グディカンスト, W.B. (2002) 『異文化間コミュニケーション入門—日常間の相互理解のために』 丸善株式会社
- ネウスポトニー, J.V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波書店
- 岡隆・古畑和孝 (2002) 『社会心理学小事典 [増補版]』 有斐閣
- 岡部朗一 (1996) 「文化とコミュニケーション」 古田暁監修、石井敏・岡部朗一・久米昭元 『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件』 [改訂版] 有斐閣 39-59
- Porter, R.E. & Samovar, L.A. (1976) *International communication: A reader*. Belmont, CA: Wadsworth.
- 佐々木由美 (2000) 「会話スタイル」 西田ひろ子編 『異文化間コミュニケーション入門』 創元社 30-74.
- 杉本良夫 (1996) 「日本文化という神話」 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編 『日本文化の社会学』 岩波書店 7-37.
- 杉本良夫・ロス・マオア (1995) 『日本人論の方程式』 筑摩書房
- 清ルミ (1997) 「外国人社員と日本人社員—日本語によるコミュニケーションを阻むもの—」 『異文化コミュニケーション』 第10号、57-73.
- 竹田青嗣 (1993) 『はじめての現象学』 海鳥社
- 竹田青嗣 (1989) 『現象学入門』 日本放送出版協会
- 竹田青嗣 (2004) 『現象学は〈思考の原理〉である』 筑摩書房
- 遠山淳 (2001) 「異文化接触中心の理論」 石井敏・久米昭元・遠山淳編著 (2001) 『異文化コミュニケーションの理論—新しいパラダイムを求めて』 有斐閣 111-139.
- 海野素央 (1998) 「米国社会における日本人上司のビジネス行動」 穴田義孝編 『日本人の社会心理—けじめ・分別の論理』 人間の科学社 157-173.
- 渡辺雅子 (2002) 「ニューカマー—外国人の増大と日本社会の文化変容—農村の外国人妻と地域社会の変容を中心に」 宮島喬・加藤弘勝編 『国際社会2 変容する日本社会と文化』 東京大学出版会 15-39
- 山田富秋 (1999) 「会話分析をはじめよう」 好井裕明・山田富秋・西阪仰編 『会話分析への招待』 世界思想社 1-35.
- 山崎敬一 (2000) 「組織と技術のエスノメソドロロジー」 今田高俊編 『社会学研究法—リアリティのとらえ方』 有斐閣 118-139.
- 好井裕明 (1999) 「制度的状況の会話分析」 好井裕明・山田富秋・西阪仰編 『会話分析への招待』 世界思想社 36-70.